

「保護者も笑顔」になるために

福島市立清明小学校長 岩下 聡

今年度、最初の職員会議で「子どもも笑顔、保護者も笑顔、教師も笑顔」と、校長の思いを伝えた。では、「保護者も笑顔」を実現するためには、どうすればよいのか。3つの仮説を考えた。

- 1 「子育て“相談”支援」を充実させると、保護者をもっと笑顔になるのではないか。
- 2 「子育て“環境”支援」を充実させると、保護者をもっと笑顔になるのではないか。
- 3 「子育て“研修”支援」を充実させると、保護者をもっと笑顔になるのではないか。

「1 相談支援」の例である。ある日保護者が子どもを連れて職員室にやってきた。見慣れない消しゴムがたくさん家にあるのだと言う。詳細は省くが、本人の心理的な要因が大きいと考え、総合教育センターでの教育相談を勧め、母と子はスクールカウンセラーの面接を受けた。

「2 環境支援」の例である。市の支援を受けており、子どもの登校が安定しない家庭がある。学校との関係が良好とは言えない。そこで、スクールソーシャルワーカーの派遣を依頼し、市の機関との関係者会議を複数回設定していただいた。

「3 研修支援」の例である。2学期に「CAP（子どもへの暴力防止）」の講座を授業参観に合わせて保護者対象に行う。どんな感想を聞くことができるか楽しみである。

これらは一例ではあるが、保護者の悩みに寄り添う実践を積み重ねているところである。

さらには、「学校だより第13号」の【校長のつぶやき】のコラムで、「“親”として困っているときは、よかったら校長室を訪ねてほしい」「私でよいのなら、話を聞くだけならできる。話すだけでも心が軽くなることもある」と訴えた。校長室の入口の戸のノックが止まないかと思っただが、相談者はまだ一人もいない。ざ・ん・ね・ん！

学校・家庭・地域をつなぐ物語

福島市立土湯小学校長 伊藤 勝彦

本校には、今年度で27回を迎える伝統行事があります。それは、毎年1月に本校を卒業した成人を招いて行われる「こけし引き渡し式」です。これは、卒業するとき6年間の思い出と未来への希望を込めて制作したこけしを成人した卒業生に引き渡す式です。

この行事は、豊かな湯けむりと貴重な動植物群、古い伝統に育まれた自然や文化が息づく「ふるさと土湯」に対する郷土愛や愛校心を一層深めるとともに、地域の発展に寄与する心を育てることをねらいとして始められたものです。

式では、成人した卒業生と保護者、制作に携わったこけし工人、当時の校長先生、教頭先生、担任の先生を招き、在校生と保護者、教職員、来賓の方々とともに、こけしの引き渡しや当時の先生方のお話、在校生による交流会などが催されます。

引き渡すこけしは、学校でお預かりし昇降口から職員室に続くガラス戸棚に大切に8年間保管されています。在校生は、毎日そのこけしを見ながら学校での生活を送っています。

卒業生一人一人は、「土湯の心」でもあるこけしに将来の希望と夢を乗せ巣立ってきました。そして成人を迎えたこの日、この学舎に戻り、あの日の思い出とともに土湯のすばらしい人と伝統に再会します。卒業生は立派に成人し、在校生はその卒業生の姿を見て、希望と夢を抱きます。伝統の力の大きさを感ずる瞬間です。

学校の力だけでは成しえることのできない、学校・家庭・地域が一体となったこのよき伝統こそ、地域の教育力を最大限に生かした温かで豊かな営みです。今年度成人する卒業生は7名で、来年1月12日には立派に成長した姿を見せてくれます。卒業生と在校生の交流を通して「心身ともにたくましく、人間性豊かな子ども」（本校教育目標）に成長していく物語が、また新たな1ページを刻みます。

あたりまえの幸せ

いちから 二志野 さんびぜん
一唐 (津) 二志野 三備前

川俣町立富田小学校長 小山 智恵子

私のふるさとは、浪江町。7年前のあの時のことは今でもはっきりと覚えている。と言うより忘れてはならないと思っている。川俣町にも多くの浪江町民が避難し、地域の方々からたくさんの優しさをいただいた。当時のことを思い出すと今でも心が熱くなり、感謝の気持ちでいっぱいになる。

今の低学年の子どもたちは、あの震災・原発事故の様子を知らない。だからこそ私はあの事実を目の前の子どもたちに伝えていかなければならないと思っている。全校集会での校長講話はいつも子どもたちの心に訴えかける内容にするよう心がけてきた。『人は一人では生きていけないこと』『必ず誰かに支えられ助けられていること』『あたりまえのいつもの生活ができることの幸せ、それを大事にしてほしいこと』『今生きていることに感謝する気持ちを育てていくこと』また子どもが避難してもどってこない小学校校長を4年間経験した私は、学校に子どもがいることの幸せについて教職員にも伝えてきた。このあたりまえの幸せは、経験した者にしかわからないことであると思うから……。

現在本校の教育活動にはたくさんの地域の方々がかかわってくださっている。

「まるごとシルク」 「里山体験」

～地域とともに学ぶ教育活動～

「富田子ども夏祭り」 「富田子どもお囃子教室」

～地域の良さに気づき地域における自分の役割を理解し行動する態度を養うための交流活動や伝統伝承～

「絹の里見守り隊」 「たのしい教室」

～子どもたちの安全な登下校や放課後を見守る活動～

子どもたちは地域の方々に元気よく挨拶ができるようになり、それぞれの目標に向かって一生懸命頑張る姿を見せてくれている。自分たちが住んでいる地域の絆を確認させ、生まれ育った地域に誇りを持って生活する姿をこれからも育んでいきたい。人として生きていくうえで忘れてはならないことを大切にしながら……。

福島市立瀬上小学校長 松野 光伸

昔から、「一楽 二萩 三唐津」とか「一井戸 二楽 三唐津」など、茶道の抹茶碗の順位あるいは格付けとして表現されてきた言葉がある。

私は以前から焼き物が好きで、鑑たり買ったり使ったりして楽しんでいる。しかし、残念ながら作ったことはない。

私の好みの焼き物は、つるつるした見るからに綺麗な磁器(石物)よりは、唐津や備前のような陶器(土物)が好きで、どちらかという地味な雰囲気のものの方が自分に合っているようである。

以前は、茶道具に関心のあった時期もあったが、現在は酒器(徳利やぐい呑み)が主である。酒器の世界では、「備前の徳利 唐津のぐい呑み」というのが最高の組み合わせの定番である。言うまでもなく、備前と唐津の酒器は、飲んでいても何とも言えない雰囲気があり、至福のひと時を過ごすことができる。備前や唐津のほかにも、志野や萩なども使うほどに器が育ってきて楽しい。

そこで、私なりに焼き物ベスト3を表現すると、「一唐(津) 二志野 三備前」となる。二位と三位は、語呂の関係で順序は逆転しているが……一位にあげた唐津は、焼き物好きが最後に辿り着く焼き物と言われ、とても魅力的で奥が深い。特に古唐津と呼ばれる桃山時代から江戸時代初期の唐津は、焼き物ファン垂涎の的である。私自身、自分の息子に「唐津」と命名しようと本気で考えたくらいである。

ところで、蛇足ではあるが、現在勤務している瀬上小学校に着任した平成28年4月、校内巡視中、理科室で備前焼の鶴首の花入れ(一輪挿し)を発見。窯印(サイン)から備前焼の作家「見附文雄」作と判明。以来、校長室に飾って楽しんでいる。しかし、なぜ理科室に備前焼の花入れがあったかは未だに謎のままである。